会長挨拶

佐藤煒水（永陵）

令和七年三月の総会の議決を経まして、この度、近畿漢詩連盟会長に再任することになりました佐藤永陵でございます。

もとより綿力薄材の身でありますが、日本の漢詩文化・文人文化継続発展のため、尽力してまいりたいと存じます。今後は山内相談役をはじめ新役員の諸先生そして会員の皆様のご支援ご協力を得まして、会運営を行っていく所存です。よろしくご指導お願いいたします。

さて、今年も「二五回近畿漢詩連盟会報」を発行するはこびとなり、合わせて漢詩集を掲載することとなりました。今年は昨年の応募数より若干下回りましたが、多くの玉作が集まり、たいへんうれしく思っております。応募作品の中には「近畿漢詩連盟作詩基準」からは少し逸脱する作品も散見されましたが、作者の意向を尊重して、そのまま掲載いたしました。今後は皆様のご意見を踏まえながら、より良いものにブラッシュアップしていきたいと思っております。今後ともご指導お願いいたします。

また、昨年の会員数は一昨年より増加し、特に三〇～五〇代の会員増加は大変喜ばしく、新しい光を見出したような気がいたします。今年はさらなる会員増加を期待しております。

さらに、詩吟界、書道界、芸術界そしてメディア界で活躍する三十代、四十代の会員四名を新たに役員として登用することにより、本会の新陳代謝を図ることができました。志の高い若者ですので、今後の近畿漢詩連盟の中核として大きく育てていきたいと考えております。会員皆様の暖かいご声援をよろしくお願いいたします。

今後の近畿漢詩連盟の運営にあたりましては、「吟行会」や「研修会」等を企画し、会員皆様に喜ばれる組織を目指していきたいと願っております。

当会の更なる発展のため、会員の増加のご協力をお願いいたします。

令和七年

近畿漢詩連盟漢詩集

荒井みどり

新涼読書

故山夕照見秋生
小砌籬辺蟋蟀鳴
習習西風梧葉揺
一窓灯火読書情

新涼読書

故山の夕照　秋の生ずるを見る
小砌の籬辺　蟋蟀鳴く
習習たる西風　梧葉揺れ
一窓の灯火　読書の情

飯田正仁

千曲川逍遥

浅間山影穿空聳
碧水遥然千曲流
欲向青天吹草笛
瞳瞳日上信州秋

千曲川逍遥

浅間の山影　空を穿ちて聳え
碧水　遥然たり　千曲の流れ
青天に向かいて　草笛を吹かんと欲すれば
瞳々として日は上る　信州の秋

緑青　池崎みどり

晩秋偶成

郊墟柿熟白雲長
促織哀鳴未晩霜
田婦耕耘農事急
家狸臥牖浴秋光

郊墟　柿は熟し　白雲長く
促織　哀鳴して　未だ晩霜ならず
田婦　耕耘　農事急なれど
家狸　牖に臥して　秋光に浴す

石野容三

尋友

東風嫋嫋山荘静
日午携瓢敲友門
久闊忘時詩酒宴
共吟倶語月黄昏

友を尋ぬ

東風　嫋々　山荘静かに
日午　瓢を携え　友が門を敲く
久闊　時を忘る　詩酒の宴
共に吟じ　倶に語れば　月黄昏

今西　進

桂川堤散策

東風天地麗陽光
堤堰水仙群落芳
爽気渕叢漂鳥戯
老旄流憩意軒昂

桂川堤散策

東風　天地　陽光麗かに
堤堰の水仙　群落芳し
爽気　渕叢　漂鳥戯れて
老旄　流憩　意軒昂たり

秋夜聴虫

残蝉啼罷早涼生
碧落玲瓏月色清
処処草虫哀韻響
前庭敲耳已三更

秋夜虫を聴く

残蝉　啼くを罷(や)めて　早涼生ず
碧落　玲瓏として　月色清し
処々の草虫　哀韻の響
前庭　耳を敲て　已に三更

春嵐　植田隆三

峰川　植村了子

観楓雑詠

遙望洛北一天晴
伴友嵐山楓樹程
錦繍絵秋看不尽
勝花絶景促詩情

遙に望む　洛北　一天の晴
友を伴う　嵐山　楓樹の程
錦繍　秋を絵いて　看を尽きず
花に勝る　絶景　詩情を促す

梅雨閑詠

熟梅気候溢河川
水潤草菜禾満田
凭几読書心底倦
雨余晴昊勝秋天

熟梅の気候　河川溢れ
水は草菜を潤し　禾　田に満つ
几に凭りて読書　心底倦む
雨余の晴昊　秋天に勝る

臼田諄司

梅雨閑詠

西山連峰賛歌

翠峰千里白雲興
碧樹十分紅采勝
郷国桃源何処有
西山悠久使人称

初冬偶成

霜晨小院菊花凋
紅葉散風唯寂寥
如水流年帰一夢
老残孤坐酔中謡

鵜野高資

西山連峰賛歌

翠峰　千里　白雲興り
碧樹　十分　紅采の勝
郷国の桃源　何れの処に有りや
西山　悠久　人をして称せしむ

浦澤嘉子

初冬偶成

霜晨の小院　菊花凋み
紅葉　風に散じて　唯だ寂寥
水の如し流年　一夢に帰し
老残　孤坐して　酔中に謡う

大串みと

除夕

今宵不厭一灯親
歳月粛粛感慨新
世事平生如逝水
鐘声百八暗伝春

今宵　厭わず　一灯親しみ
歳月　粛々　感慨新たなり
世事　平生　逝水の如く
鐘声　百八　暗に春を伝う

時事偶感

天上飛船移棹頻
金蟾玉兎莫容身
野僧偏愛玲瓏月
独有虚空不染塵

天上の飛船　棹を移すこと頻りにして
金蟾　玉兎　身を容るること莫からん
野僧　偏に愛す　玲瓏の月
独り虚空に有りて　塵に染まらざるを

大久保貫山

除夕

今宵　厭わず　一灯親しみ
歳月　粛々　感慨新たなり
世事　平生　逝水の如く
鐘声　百八　暗に春を伝う

時事偶感

天上の飛船　棹を移すこと頻りにして
金蟾　玉兎　身を容るること莫からん
野僧　偏に愛す　玲瓏の月
独り虚空に有りて　塵に染まらざるを

太田尚志

晩秋月夜坐湖辺

秋到江州一鏡円
西風粛瑟入湖辺
嗚呼初志今安在
日日尚尋千里天

晩秋の月夜　湖辺に坐す
秋は江州に到りて　一鏡円かに
西風　粛瑟として　湖辺に入る
嗚呼　初志　今　安くにか在る
日々　尚尋ぬ　千里の天

看桜

東郊十里及芳時
爛漫桜花春色奇
樹下蘭交催賀宴
歓談笑語忘帰期

東郊　十里　芳時に及ぶ
爛漫たる桜花　春色奇なり
樹下の蘭交　賀宴を催す
歓談　笑語　帰期を忘れる

菖直　大坪好徳

看桜

雨中立山連峰

連山漫漫圧層雲
日午雷声雨脚分
三伏狂風無酷暑
放晴満地共欣欣

秋夜雑詠

雨洗残炎節序移
新涼満地露華滋
嬋娟涼月三更下
故友追懐多所思

岡田晴美

雨中立山連峰

連山　漫々　層雲を圧し
日午の雷声　雨脚分つ
三伏の狂風　酷暑なく
晴を満地に放ちて　共に欣々

秋夜雑詠

雨は残炎を洗いて　節序移る
新涼　地に満ちて　露華滋し
嬋娟たる涼月　三更の下
故友　追懐して　所思多し

風声　小川弘二

輕舟　鹿児島秀夫

作詩修行

八十寿翁書案前
賞花弄月潤華箋
推敲幾度君休笑
正是苦吟文字禅

作詩修行

八十の寿翁　書案の前
花を賞で月を弄して　華箋を潤す
推敲　幾度　君笑うを休めよ
正に是　苦吟　文字の禅なり

春晴出遊

麗日春郊花綻時
誘朋吟屐踏青之
禽歌蝶舞冶遊裏
留落観桜共案詩

菖関　梶田孝道

春晴出遊

麗日　春郊　花綻ぶ時
朋を誘て　吟屐　青を踏みて之く
禽歌　蝶舞　冶遊の裏
留落　観桜　共に詩を案ず

讃小原六六庵先生

連名才穎此臻郷
交契論詩志発揚
天寵書懐調掉尾
提撕心意到今彰

竹泉　片岡和子

小原六六庵先生を讃う

名を連ねし才穎　此れ　郷に臻り
交契　詩を論じ　志　発揚す
天寵の書懐　掉尾を調え
提撕す心意　今に到りて彰らかなり

無題

三更急歩独還郷
月照幽叢帯露香
尋母臥床方丈暗
蕭然晩節思難忘

勝本公子

無題

三更　急歩して　独り郷に還る
月は幽叢を照して　露香を帯ぶ
母を臥床に尋ぬれば　方丈暗く
蕭然たる　晩節　思い忘れ難し

秋思

月華星彩好風光
玉露秋心酔味長
節過何知三径外
芙蓉満架一院香

祭詩

世路崢崢欲問津
浮生荏苒百年身
龕前祭賦今宵尽
撥気胸許盪待春

加藤初恵

秋思

月華　星彩　風光好く
玉露　秋心　酔味長し
節過ぎ　何ぞ知る　三径の外
芙蓉　架に満ちて　一院香

祭詩

世の路は崢々たり　津に問わんと欲す
浮生は荏苒として　百年の身
龕前　賦を祭して　今宵尽せり
気を撥し　胸を許し　盪して春を待つ

櫻寛　加茂とみこ

晩秋偶感

秋深影冷水雲収
一様風光鳥雀届
少数残紅人亦老
夕陽欲暮与誰遊

法寿山正法寺

西山幽境晩秋融
鳥獣庭園興不窮
紅葉一枝映池苑
古都望見遠霞中

雲周　川浦吉和

晩秋偶感

秋深く　影冷やかに　水雲収まる
一様の風光　鳥雀届まる
少数の残紅　人亦た老い
夕陽　暮れんと欲し　誰と与に遊ばんや

川勝芳三

法寿山正法寺

西山　幽境　晩秋融なり
鳥獣の庭園　興　窮まらず
紅葉　一枝　池苑に映じ
古都　望見すれば　遠霞の中

看菊小集

東籬秋色送幽香
菊発千枝競麗粧
招友雅筵詩料好
欲題佳句苦吟長

天王山懐古

飛楓颯颯丘陵立
旗影山河古跡中
天下覇図渾一夢
行雲独佇夕陽紅

青峯　川島峯子

看菊小集

東籬　秋色　幽香を送り
菊発いて　千枝　麗粧を競う
友を招き　雅筵　詩料好し
佳句を題せんと欲し　苦吟長し

千紅　河村澄子

天王山懐古

飛楓　颯々　丘陵に立ち
旗影　山河　古跡の中
天下の覇図　渾て一夢
行雲　独り佇めば　夕陽紅なり

春日偶成

雨余花落掃荒庭
蝶怨鶯愁白草亭
一啜新茶閑作句
送春執筆自安寧

秋夜偶成

西窓樹影舞涼飈
満地蛩声夜寂寥
坐寄友朋歌一詠
秋天皓皓月光饒

川村荷心

春日偶成

雨余　花落ち　荒庭を掃く
蝶は怨み　鶯は愁う　白草の亭
一たび新茶を啜りて　閑かに句を作り
春を送り　筆を執りて　自ずから安寧

秋夜偶成

西窓の樹影　涼飈に舞い
満地の蛩声　夜寂寥たり
坐(そぞろ)に友朋に　歌一詠を寄れば
秋天　皓々　月光饒し

菊池睦子

初冬古刹

霜楓落尽已過秋
古刹無人塔下幽
冷気侵肌銀漢燦
鐘声閑響夜悠悠

題紅葉

箕面深溪澗水流
瀑声清迴立橋頭
紅楓返照山中景
幽静仙郷満目秋

木谷和雄

初冬古刹

霜楓　落ち尽きて　已に秋を過ぎ
古刹　人なく　塔下幽なり
冷気　肌を侵して　銀漢燦たり
鐘声　閑かに響いて　夜悠々

鷺冠　北村恭一

紅葉に題す

箕面の深溪　澗水流れ
瀑声　清迴　橋頭に立つ
紅楓　返照　山中の景
幽静たる仙郷　満目の秋

遊上高地

一晴一雨草芽生
半淡半濃山嶂横
聴取長橋流水響
江心揺曳葉舟軽

台湾漫遊　其三

穿天楼閣放輝光
巷陌紅燈似麗粧
友語余論文墨道
相逢在外又何妨

木村九星

上高地に遊ぶ

一晴　一雨　草芽生じ
半ば淡く　半ば濃やかなり　山嶂横たわる
聴取す　長橋　流水の響
江心　揺曳　葉舟軽し

木村輝美

台湾漫遊　其三

天を穿つ楼閣　輝光を放ち
巷陌の紅燈　麗粧に似たり
友は語り余は論ぜん　文墨の道
在外に相逢うて　又何ぞ妨げん

櫛谷元紀

看月

連日残炎堕甑中
奔雷驟雨晩涼通
窓前可酌氷壷酒
満地虫声月玲瓏

法隆寺

行楽郊村一面田
人耕用水大和川
堤防歩歩法隆寺
太子和心万世伝

看月

連日の残炎　甑中に堕つ
奔雷　驟雨　晩涼通る
窓前　酌む可し　氷壷の酒を
満地の虫声　月玲瓏たり

法隆寺

行楽　郊村　一面の田
人は耕やす　用水　大和川
堤防　歩々　法隆寺
太子の和心　万世に伝えん

久保澄晴（すばる）

（小学五年）

七夕逍遥

流蛍点点漢星流
松籟一過納涼遊
互答牽牛兼織女
江辺独歩月華浮

月下逍遥

蒼然暮色遠山平
馥郁桂花水上横
微酔可親煙月下
西風孤影笛音清

熊谷亜莉沙

夏夜逍遥

流蛍　点々　漢星流れ
松籟　一過　納涼の遊
互いに答う　牽牛と織女と
江辺　独り歩せば　月華浮ぶ

小杉るい

月下逍遥

蒼然たる暮色　遠山平らかなり
馥郁たる桂花　水上に横たわる
微酔　親しむべし　煙月の下
西風　孤影　笛音清し

五代文男

初夏望郷

陽光初夏清風好
葵影青苔新樹明
午夢旅愁山遠近
蝉吟客舎望郷情

山寺観楓

来訪深山古梵宮
鐘声隠隠度秋穹
青蛾染出楓林景
輝映夕陽風亦紅

初夏望郷

陽光　初夏　清風好く
葵影　青苔　新樹明らかなり
午夢の旅愁　山遠近
蝉吟の客舎　望郷の情

山寺観楓

来訪す深山　古梵宮
鐘声　隠々として　秋穹を度る
青蛾　染め出す　楓林の景
夕陽に輝映して　風も亦紅なり

琴泉　小林順子

郷園秋夜

秋河燦爛夜森森
栗子拾遺昔日心
爐畔老爺何日会
息災唯願二毛侵

冬暁

寒郊散歩聴晨鐘
呵手襲衣扶痩筇
一抹彩霞天欲暁
西望残月掛蒼松

小筆鳳外

郷園秋夜

秋河　燦爛　夜森々
栗子　拾遺す　昔日の心
爐畔　老爺　何れの日にか会わん
息災　唯だ願って　二毛侵す

冬暁

寒郊歩を散ずれば　晨鐘を聴く
手を呵し衣を襲ねて　痩筇に扶けらる
一抹の彩霞　天暁けんと欲す
西を望めば　残月　蒼松に掛かる

瑞峰　小松康一

斉藤記代子

溽暑偶成

充充溽暑也尋常
嘒嘒蝉声囲草堂
日午長天三伏熱
碧花独送一庭涼

溽暑偶成

充々たる溽暑　也た尋常
嘒々たる蝉声　草堂を囲む
日午の長天　三伏の熱
碧花　独り送る　一庭の涼

西面和子

仲秋明月

明窓皎皎月光流
千里無雲桂気幽
快哉秋庭詩味浄
些涼風爽夜愈悠

仲秋の明月

明窓　皎々として　月光流れ
千里　雲なく　桂気幽かなり
快なる哉　秋庭　詩味浄く
些涼　風爽やかにして　夜　愈々(いよいよ)悠なり

世事偶感

為権恣説戦空論
誑世弄人須戯言
虞夏神農求不尽
汝当粉骨洗心魂

観楓雑詠

霜後探秋古寺辺
随風幾曲一山妍
紅楓深浅無人掃
四面如図物外天

世事偶感

権の為に説を恣にし　空論を戦わし
世を誑し　人を弄して　戯言を須う
虞夏　神農　求めて尽きず
汝　当に粉骨して　心魂を洗うべし

観楓雑詠

霜後の探秋　古寺の辺
随風　幾曲　一山妍たり
紅楓　深浅　人の掃くなし
四面　図の如く　物外の天

澹水　坂口康一

桃菊　坂口鶴亀

夏夜遊舟

炎蒸夏夜釣江湖
如鏡銀波月色鋪
遥望一湾天似水
清風独領盍帰乎

雨余

雨余閭巷度清風
鳥語閑聞簾幕中
徐閉残書眺庭架
碧花点露自玲瓏

龍泉　崎山邦子

夏夜遊舟

炎蒸　夏夜　江湖に釣る
鏡の如き銀波　月色鋪く
遥かに望む　一湾　天　水に似たり
清風　独り領して　盍(なん)ぞ帰らんや

永陵　佐藤煒水

雨余

雨余の閭巷　清風度り
燕語　閑に聞く　簾幕の中
徐に残書を閉ざして　庭架を眺むれば
碧花　露を点じて　自ずから玲瓏たり

寄友

僻村寂寂菲才姿
心緒冷冷流一絲
何日眺望蒼然海
君翔天際復奚疑

大根島牡丹園

薫風颯颯嫩芽新
庭樹翠陰苔色匂
幾万花王充苑路
物華明媚興津津

高田千英

友に寄す

僻村　寂々　菲才の姿
心緒　冷々　一絲を流す
何れの日か　眺望せん　蒼然の海を
君よ天際に翔け　復た奚ぞ疑わん

州蓉　高橋順子

大根島の牡丹園

薫風　颯々　嫩芽新なり
庭樹　翠陰　苔色匂う
幾万の花王　苑路に充ちて
物華　明媚　興津々

梢蘭　田中知子

晩秋

紅葉　燃え尽きて　薄寒流る
庭樹　紛々として　心上の秋
漸く老いて何ぞ堪えんや　限り無きの感
年々友少にして　郷愁を惹く

晩春即事

前林の楓樹　翠　幃を成し
双燕　営々　眼を照して飛ぶ
遥かに見る　片雲　意有るが如く
閑人　尽日　春暉を弄す

田畑明彦

晩秋

紅葉燃尽薄寒流
庭樹紛紛心上秋
漸老何堪無限感
年年友少惹郷愁

晩春即事

前林楓樹翠成幃
双燕営営照眼飛
遥見片雲如有意
閑人尽日弄春暉

月下憶朋

夜来着信写輪月
急見東空得共遊
吾等戦中生誕友
仲秋画像使人愁

大和晩秋

江山石径暮山蒼
鐘語寥寥古仏堂
晩艶野情秋寂寂
仰看幽賞欲昏黄

雲郷　田村　功

月下朋を憶う

夜来　着信　輪　月を写し
急ぎ見る　東空　共に遊ぶを得る
吾等　戦中　生誕の友
仲秋の画像　人をして愁え使む

白遊　堤　清子

大和晩秋

江山の石径　暮山蒼く
鐘語　寥々　古仏の堂
晩艶の野情　秋寂々
幽賞を仰ぎ看れば　昏黄ならんと欲す

夏日偶成

驟雨俄休水急流
炎雰已去似清秋
涼風入袖吟情旺
忘我須臾立橋頭

春日訪友

春城風暖促吟鞋
尋訪幽栖飲酒偕
評画弾琴詞未就
高歌旧曲意弥佳

ティアン典子

大暑偶成

驟雨　俄に休みて　水　急ぎ流れ
炎雰　已に去りて　清秋に似たり
涼風　袖に入りて　詩情旺に
我を忘れて　須臾　橋頭に立つ

嶺北　中島俊克

春日　友を訪う

春城　風暖くして　吟鞋を促し
幽栖を尋訪して　飲酒を偕にす
画を評し　琴を弾じるも　詞　未だ就らず
旧曲を高歌すれば　意　弥よ佳なり

令和五年春文化庁移京都

雪裏占春弘道梅
桜花爛漫洛中臺
敗戦開化忘重己
文武平和独立魁

国際連盟

無奈会談膠着何
言行終少戦争多
優先自国論興廃
世界安康皆講和

中田昭栄

令和五年春文化庁移京都に移る

雪裏　春を占む　弘道の梅
桜花　爛漫　洛中の臺（うてな）
敗戦　開化　己を重んじるを忘れたり
文武　平和は独立の魁なり

國峰　中西　倭

国際連合

会談　膠着　奈何ともする無し
言行　終に少なくして　戦争多し
自国を優先し　興廃を論ずとは
世界の安康　皆和を講ずべし

清寿　中村良枝

飛鳶

村荘桐樹一枝黄
静謐嵐山雲影横
時見飛鳶天外舞
両三角髪放歓声

飛鳶

村荘の桐樹　一枝黄なり
静謐の嵐山　雲影横たわる
時に見る　飛鳶　天外に舞い
両三の角髪　歓声を放つ

西口　唯

除夕

白雪霏微一草廬
枕辺灯火太簫疎
鐘声百八年将尽
惜陰孜孜対詩書

除夕

白雪　霏微たり　一草廬
枕辺の灯火　太だ簫疎
鐘声　百八　年将に尽きんとし
惜陰　孜々(ししし)として　詩書に対す

寒霞渓観楓

石径攀来風颯然
白雲破処仰天辺
遥瞻奇絶寒霞壑
満目如燃楓澗鮮

寒霞渓観楓

石径　攀り来れば　風颯然たり
白雲破れる処　天辺を仰ぐ
遥に瞻(みる)る　奇絶　寒霞の壑
満目　燃るが如く　楓澗鮮やかなり

野田三郎

新年口號

瑞雲曖曖太平京
満地新粧雪鋪瓊
椒酒辛盤遊戯好
如今八帙惰心萌

新年口號

瑞雲　曖々たり　太平の京
満地　新粧して　雪　瓊を鋪く
椒酒　辛盤　遊戯好く
如今　八帙　惰心萌す

野村桐華

萩原伊玖子

探梅

東風嫋嫋訪梅花
淡粉回芳詩趣濃
老樹雪残鶯語拙
残春静聴思無邪

探梅

東風　嫋々　梅花を訪ねれば
淡粉　芳を回りて　詩趣濃やかなり
老樹　雪は残り　鶯語拙なり
残春　静かに聴けば　思い邪なしを

橋野裕文

冬暁即事

遠山擁雪暁雲寒
白屋小庭冬亦闌
時見狂花空引興
成堆落葉歳将残

冬暁即事

遠山　雪を擁き　暁雲寒く
白屋の小庭　冬亦た闌なり
時に見る　狂花　空しく興を引き
堆を成す　落葉　歳将に残せり

新薬師寺　其二

天平創建光明意
慈愛如来名薬師
十二神将立円陣
扶人護仏荷干支

歳晩偶成

世塵臘月使人忙
日日家中心不常
一陣朔風重落葉
匆匆作務莫相妨

雲外　橋本征一

新薬師寺　其二

天平の創建　光明の意
慈愛の如来　名は薬師
十二の神将　円陣に立ち
人を扶け仏を護り　干支を荷う

長谷川一恵

歳晩偶成

世塵の臘月　人をして忙がしめ
日日の家中　心　常ならず
一陣の朔風　落葉を重ね
匆々たる作務　相い妨げること莫れ

原田　拡

蓮塘波光

藜笻踏露玉荷池
一白清容仙女姿
正是凌晨香世界
波光漾漾日昇時

蓮塘波光

藜笻　露を踏む　玉荷の池
一白の清容　仙女の姿
正に是れ　凌晨の香世界
波光　漾々　日昇る時

日根野　卓

七夕

新涼七夕竹風清
迢迢九穹銀漢横
織女牽牛幽会契
誰知天帝愛隣情

七夕

新涼の七夕　竹風清く
迢々たる九穹　銀漢横たわる
織女　牽牛　幽会の契り
誰か知る　天帝　愛隣の情

小春吟

小春山寺鳴幽鳥
随処丹楓歩歩軽
正是農夫田舎趣
行行訪友楽茶鐺

無題

幽庭独坐浸虫声
月暗静寒雲影横
湧溢追懐眠未就
夜風衣冷到深更

平木寿々美

小春吟

小春の山寺　幽鳥鳴き
随処の丹楓　歩々軽し
正に是れ　農夫　田舎の趣
行々（ゆくゆく）　友を訪ねて　茶鐺を楽しむ

廣瀬幸子

無題

幽庭　独り坐して　虫声に浸り
月暗く　静寒　雲影横たわる
湧溢す追懐　眠未だ就かず
夜風　衣冷やかにして　深更に到る

晩秋山行

秋深山峙己黄昏
寂歴松林双鳥翻
楓樹石蹊探勝旅
奇峰五彩洗塵煩

晩秋山行

秋深く　山峙(そば)だちて　己に黄昏
寂歴たる松林　双鳥翻たく
楓樹の石蹊　探勝の旅
奇峰の五彩　塵煩を洗う

藤田彩月

桃源郷

渺茫仙境立山巓
満目雲流眺望鮮
気暖無声懐古涙
澄心吾静仰天辺

桃源郷

渺茫たる仙境　山巓に立てば
満目　雲は流れ　眺望鮮やかなり
気暖かに声なく　懐古の涙
心を澄まして　吾静かに　天辺を仰ぐ

法貴博光

古堂盛秋

鐘聲陰陰已斜陽
返照古堂塔影長
楓葉散紅人半散
盛秋当識競新粧

仲秋月

寂寞禅宮金桂漂
行人止歩款良宵
東天照出今夜月
共見彩雲多幸要

堀　翠恵

古堂盛秋

鐘聲　陰々として　已に斜陽
返照の古堂　塔影長し
楓葉は紅を散じ　人半ば散ず
盛秋　当に識るべし　新粧を競うを

仲秋の月

寂寞たる禅宮　金桂漂い
行人　歩を止めて　良宵を款しむ
東天　照し出す　今夜の月
共に彩雲を見て　多幸を要(もと)む

本多佳奈

秋夜懐友

滿天顥氣已仲秋
独聴窓前虫韻愁
分手三年千里友
雁書一筆向君投

秋夜友を懐う

天に満つる顥気　已に仲秋
独り聴く窓前　蟲韻の愁い
手を分って三年　千里の友
雁書一筆　君に向いて投ぜん

湖舟　本田裕志

勝龍寺城

城濠碧水白蓮鮮
櫓染朝暉指九天
人傑細川名未滅
覇図悲話迴堪憐

勝龍寺城

城濠の碧水　白蓮鮮やかに
櫓は朝暉に染りて　九天を指す
人傑　細川　名未だ滅せず
覇図の悲話　迴かに憐れむに堪えたり

前田正子

寒夜読書

風撲紙窓寒夜荘
一輪冷月満書堂
史編誦読興亡跡
八百星霜万恨長

石山寺初冬

北風山寺暮雲飛
門巷蕭蕭人跡稀
枯葉成堆冬尚浅
橙黄橘緑帯寒暉

前田春樹

寒夜読書

風は紙窓を撲つ　寒夜の荘
一輪の冷月　書堂に満つ
史編誦読　興亡の跡
八百の星霜　万恨長し

石山寺初冬

北風の山寺　暮雲飛び
門巷　蕭々として　人跡稀なり
枯葉　堆を成し　冬尚お浅く
橙黄　橘緑　寒暉を帯ぶ

升方恵子

浜北晩秋

天龍川瀬夕陽春
浜北禅林落葉重
陰陰昏鐘帰鳥影
閑庭独臥後凋松

想荒神谷遺蹟

驚天発見荒神遺
銅剣多多埋覆奇
金色燦然懐往事
疑心横溢興無涯

松山侑弘

浜北晩秋

天龍川瀬　夕陽春づき
浜北の禅林　落葉重なる
陰々たる昏鐘　帰鳥の影
閑庭　独り臥す　後凋（こうちょう）の松

三浦昭爾

荒神谷遺蹟を想う

驚天の発見　荒神の遺
銅剣　多々　埋覆奇なり
金色　燦然たる　往事を懐うも
疑心　横溢して　興　限りなし

凡夫

八十余齢不杞憂
今宵觴詠会吟儔
欲填衰老惟奔放
自笑凡夫更逸遊

仲秋明月

東天皎皎夜悠悠
月映瑤池顥気流
転佇庭階聴虫語
晶晶寒露入双眸

三島緑陰風

凡夫

八十余齢　杞憂せず
今宵　觴詠　吟儔と会す
衰老に填せんと欲すれど　惟だ奔放すのみ
自ら笑う凡夫　更に逸遊すとは

簑島花冠

仲秋明月

東天　皎々　夜悠々
月は瑤池に映じて　顥気流る
転(うたた)　庭階に佇みて　虫語を聴けば
晶々たる寒露　双眸に入る

中山温泉雑詠

雨余畳嶺碧玲瓏
磴道苔深曲曲通
泉石煙霞無限好
清遊妙得此山中

初秋吟

漸倒西風移物華
農村景趣素秋加
稲雲白露黄昏近
立畔観望豊歳嘉

稲邨　見寄権次郎

中山温泉雑詠

雨余の畳嶺　碧玲瓏たり
磴道　苔深　曲々通ず
泉石　煙霞　無限に好し
清遊の妙　此の山中に得たり

初秋吟

漸倒　西風　物華移る
農村の景趣　素秋加わる
稲雲　白露　黄昏近し
畔に立ち　観望すれば　豊歳嘉し

常峰　森岡常又

秋夜

月下照来滄海清
一村孤寂到深更
虫啼満耳秋千里
遊子窓前心自平

対月懐人

玉輪皎皎夜沈沈
独坐幽窓愁自深
離恨十年千里友
老来頻憶奈難尋

森川珠房

秋夜

月下　照り来れば　滄海清く
一村　孤寂として　深更に到る
虫は満耳に啼いて　秋千里
遊子　窓前　心自から平らかなり

紫暹　森下泰行

月に対し人を懐う

玉輪皎々　夜沈々
独坐　幽窓　愁い自ら深し
離恨十年　千里の友
老い来たり　頻りに憶うも　尋ね難きを奈せん

柳井孝三

訪五木村

江天空翠静朝暉
岸上含風草径微
幽境山河塵外意
吟懐鄙唄客人欷

訪五木村

江天　空翠　朝暉静かに
岸上　風を含んで　草径微なり
幽境の山河　塵外の意
吟懐　鄙唄　客人欷(な)く

雲慧　山中照子

寄題東福寺

錦繍古都秋本番
洛陽景勝落楓飜
如燃霜葉幕渓谷
体露金風禅語温

東福寺に寄題す

錦繍の古都　秋本番
洛陽の景勝　落楓飜えり
燃が如き霜葉　渓谷を幕い
体露　金風　禅語温なり

大文字送火

鐘声一杵響暝天
静泰東山在眼前
燎燭厳森千憂滅
風催秋信向誰伝

大文字送り火

鐘声一杵　暝天に響き
静泰たる東山　眼前に在り
燎燭　厳森　千憂滅し
風は秋信を催して　誰に向いて伝えん

山根青坡

修二会

平城古刹夜寒侵
誰唱南無観世音
仰見松明飛火片
歓声塵俗祓邪心

修二会

平城の古刹　夜寒侵し
誰が唱う　南無観世音
仰ぎ見れば　松明　火片を飛ばし
歓声　塵俗　邪心を祓う

山本杏華

吉岡霖丘

華燭宴

掌中娘子賦催粧
賀客欣欣談笑長
願得奇縁相敬愛
正今喜溢並鴛鴦

華燭の宴

掌中の娘子　催粧を賦し
賀客　欣々として　談笑長し
願わくば奇縁を得て　相　敬愛せよ
正に今　喜び溢れ　鴛鴦並ぶ

丘松　吉永学弘

憂時局

外患内憂応以慷
西戎北狄侵他疆
白虹貫日時艱迫
一挙誰能改政綱

時局を憂う

外患内憂　応に以って慷すべし
西戎北狄　他疆を侵す
白虹　日を貫く　時艱迫る
一挙　誰か能く　政綱を改めん

甲藍　依藤秩帆

仲秋東山

三五東山到半宵
幽庭逸興白沙昭
忽看円月浮銀盞
微酔吟哦脱世囂

仲秋東山

三五の東山　半宵に到り
幽庭　逸興　白沙昭かなり
忽ち看る　円月の銀盞に浮ぶを
微酔　吟哦　世囂を脱す